

としては主に MECAA 療法 (MTX, VP-16, CPM, Act-D, ADM), MAC 療法 (MTX, Act-D, CPM), EP 療法 (VP-16, CDDP) が用いられている。寛解が得られた12例について、各種 hCG 測定系が cut off 値に至ってからの化学療法コース数を検討すると、尿 hCG, 尿 hCG- β -CTP (以下 CTP) 及び血中 CTP が測定感度以下に至ってから各々平均 5.2, 4.6 及び 3.0 コースの化学療法が施行されていた。寛解後の再発症例は血中 CTP 値の陰性化が得られなかった症例であり、寛解判定には血中 CTP が最も有用と考えられるが、長期化学療法後においては、高 LH 血症に伴う hCG-like substance に留意する必要がある。

3) 上顎歯肉部に発生した腺癌の1例

泉 健次・野村 努 (新潟大学歯学部
河野 正己 (第一口腔外科)
村田 雅史・朔 敬 (同 口腔病理)

上顎歯肉部に原発した腺癌を経験したのでその概要を報告する。患者は61歳男性で1993年12月、上顎左側臼歯部歯肉の腫瘍を主訴に某歯科を受診し、翌年1月に当科紹介、来院した。両側顎下、上内深頸部に腫大したリンパ節、口腔内では上顎左側前歯部から第1大臼歯にかけての頬側歯肉に約 35×25 mm の腫瘍を認めた。同部より生検を施行。組織学的には腫瘍細胞は多角形、泡沫状～スリガラス様の豊かな細胞質と明るい大型の核を有し、未分化癌と診断された。CEA, CA₁₉₋₉ 高値。化学療法施行後、2月8日左側全顎部廓清術および左側上顎骨切除術施行、病理組織診は乳頭状腺癌であった。顎下部、上内深頸リンパ節に転移を認めた。術後第5腰椎転移が認められるも、ペインコントロールが得られ3月中旬一時退院したが、第5腰椎転移も認めたため、4月下旬再入院。姑息的放射線治療施行。その後 DIC, 肺水腫併発し、6月30日呼吸不全にて死亡した。

4) 口腔領域 Verrucos Carcinoma の5例

宮浦 靖司・星名 秀行 (新潟大学歯学部)
鶴巻 浩・長島 克弘 (第二口腔外科)
大橋 靖

過去21年間に経験した口腔領域の Verrucous carcinoma 5例について、年齢、性別、部位、形態、臨床診断、処置、臨床経過、病理組織学的所見を中心に報告した。

症例1: 77歳, 女性. 初診: 1985年11月8日.

部位: 下唇. 形態: 19×14 mm, 乳頭状.

臨床診断: 乳頭腫症. 処置: 摘出.

症例2: 64歳, 女性. 初診: 1985年4月15日.

部位: 舌. 形態: 16×8 mm, 分葉状.

臨床診断: 乳頭腫症. 処置: 摘出.

症例3: 79歳, 女性. 初診: 1990年2月6日.

部位: 舌. 形態: 13×10 mm, 分葉状.

臨床診断: 舌腫瘍. 処置: 摘出.

症例4: 53歳, 男性. 初診: 1993年12月3日.

部位: 舌. 形態: 24×18 mm, 有茎性.

臨床診断: 乳頭腫. 処置: 摘出.

症例5: 52歳, 女性. 初診: 1994年6月10日.

部位: 歯肉. 形態: 10×5 mm, 有茎性.

臨床診断: 乳頭腫. 処置: 摘出.

5) 口腔癌および肝癌における血清 PTHrP 値の検討

岡田 康男・土持 眞 (日本歯科大学)
小野 徹・戸谷 収二 (新潟歯学部)
加藤 讓治 (第二口腔外科)
柴崎 浩一 (同 内科)

悪性腫瘍に伴う高カルシウム血症 (Malignancy-Associated Hypercalcemia; MAHC) は肺癌, 食道癌, 口腔・咽頭癌などの扁平上皮癌, および乳癌, 腎細胞癌, ATL などに多くみられる。口腔癌においても末期になると MAHC をよく経験する。MAHC をきたす因子として副甲状腺ホルモン関連蛋白 (Parathyroid Hormone-related Peptide; PTHrP) があげられている。今回私達は、口腔癌患者および肝癌患者における血清 PTHrP を測定し、検討した。対象症例は口腔癌患者17症例、肝細胞癌患者9症例である。血清 PTHrP 値の測定は PTHrP のC末端に特異性を有する RIA キット (第一ラジオアイソトープ研究所) で行った。口腔癌患者17症例の血清 PTHrP 値の平均値は 71.8 (pmol/L) で、17症例中5例に高値を認め、5例全例が腫瘍再発症例であった。肝細胞癌患者9症例の血清 PTHrP 値の平均値は 55.4 (pmol/L) で、9症例中2例に高値を認めた。今回得られた血清 PTHrP 値と腫瘍の進展との関連について報告する。